

マルク主権同盟についての覚書

河野 佳春*

Memorandum on Maluku Sovereign Union

Yoshiharu Kawano *

Abstract

In this memorandum, I depict the activity of Maluku Sovereign Union (FKM : Front Kedaulatan Maluku). FKM is regarded as Separatists. But I indicate the possibility that FKM has cooperated with Maluku protestant church and Government of Maluku province. I think that FKM has amplified the misunderstand about Maluku Christians as separatists, proNetherland, antiIslam and antiIndonesia by South Molucca Republic's flag raising. That is a manoeuvre to restrain Jihadists and proJihadist politicians. As a result this tactics has worked. But such a misunderstanding was an important cause of the conflict of Maluku. So FKM sows future another conflict.

1. はじめに

1. 1 マルク紛争

マルク紛争は1999年1月19日に始まったイスラム教とキリスト教との宗教紛争である。アンボン島周辺を中心に大きな犠牲を出したが、2002年2月のマリノII合意以降沈静化に向かった。だが現在に至るまで間歇的に扇動事件や暴動が繰り返されている。

1. 2 マルク主権同盟

マルク主権同盟 (FKM : Front Kedaulatan Maluku 以下FKM) は、インドネシア共和国マルク州を中心に2000年12月以降活動している主にキリスト教徒の政治団体である。マスコミからも研究者からも、しばしば南マルク共和国 (RMS : Republik Maluku Selatan 以下RMS) と同一視され南マルク共和国マルク主権同盟 (以下RMSFKM) と呼称される。^①

その主張は折からのマルク紛争でラスカル・ジハード (laskar jihad 以下LJ) などイスラム民兵組織の脅威に対抗する、マルク「先住民」のマルクにおける主権主張であり、インドネシア政府や一部イスラム団体から分離主義の過激派とみなされた。しかしその実態は不明であり、武力行使など過激な活動の証拠はない。

1. 3 マルク紛争とイスラム過激派^②

1999年1月からのマルク紛争におけるイスラム過激派の本格的関与は、同年5月に始まり、主としてジャワで訓練された多数の民兵が参戦し、当初拮抗していた

地域内でのイスラム教対キリスト教のパワーバランスを激変させた。2002年5月以降彼らが撤退することで、紛争の沈静化過程は軌道に乗った。

最有力組織であったLJは、アフガニスタンでソ連の侵略に抵抗する戦いに参加したウマル・タリブ (Jafar Umar Thalib) が、1999年に女性大統領阻止を目的に結成していた政治組織 (FKAWJ : Forum Komunikasi Ahlus Sunnah Wal Jama' ah 以下FKAWJ) の軍事部門として、2000年1月に結成したマルク紛争のための民兵組織である。

ウマル・タリブは、キリスト教会がRMS運動の司令部であり、マルク州政府と共謀してイスラム教徒を追放しRMSを建国しようとしていると主張した。

1. 4 RMS

そもそもRMSは、インドネシア独立に際し、オランダ領への残留を主張した、元植民地軍兵士など少数派マルク人が、独立当初インドネシア連邦の構成国であったオランダの傀儡国家東インドネシア国の単一インドネシア共和国編入に反対し、1950年4月25日建国宣言したが、1952年までに共和国軍によって鎮圧された。

この時ジャワなどマルク域外に駐屯していた多数の植民地軍兵士とその家族などがオランダによってオランダへ移送され、さらに西イリアン地域のインドネシア併合の際にも多数が亡命し、RMS亡命政府を組織し現在もオランダに暮らしている。

オランダでのRMS運動は1970年代には過激化し、インドネシア領事館占拠事件や列車乗っ取り事件などを起こしたが、その後沈静化した。現在ではオランダ在住マルク人の政治社会運動は、一部の例外を除いてコミ

* 総合教育科

ユニティの維持発展を主眼とした穏健なものである。

2. FKM運動の経緯と実態

2.1 マルク紛争における RMS

当該紛争へのRMSの関与は当時から人口に膾炙していたが、そのような事実はなかった。以下にRMSを名乗った動きや組織の実態について述べる。

事例(1) サパルア島オウ村の場合

2000年9月18日サパルア島のキリスト教村落オウ村住民らがRMS戦士を称して、近隣のイスラム村落シリソリスラムからセラム島マソヒへ向かう高速艇を襲撃した。20日イスラム教徒が反撃し同村のRMS司令部が炎上した。^③

この事例とRMSや在蘭マルク人社会との関係を示す情報はなく、この後特にキリスト教徒側から組織的支援が行われた形跡もない。したがってこれは単純にRMSを自称した事件に過ぎないと考えられる。

事例(2) ジョン・ルア修士の場合

2003年4月20日自称南マルク共和国部隊司令官ジョン・ルア (Jhon Rea) 修士ら9人が、市内のルア修士自宅で逮捕された。本人らはマルク主権同盟との関りを否定し、自分達の南マルク共和国司令部はイングランドにあると主張した。*10月25日には、自分達は国際的に承認された南マルク共和国国民であるとして、インドネシアでの裁判を拒否、国際法廷を要求。2004年1月12日、国家反逆罪と煽動罪で懲役13から15年が確定。^④

この事例はFKMの活動開始以後であり、当事者がFKMとの関係を否定しているが、その主張にはFKMの影響がみられる。しかし司令部をオランダでなくイングランドと主張しており、在蘭マルク人社会との関係を示す根拠は無い上、キリスト教徒側の組織的支援もなかった。したがってこれは単純にRMSを自称した事件に過ぎないと考えられる。

以上のように当該紛争におけるRMSの関与は実態として存在せず、一部キリスト教徒のブラフとしての自称と、イスラム側のデマあるいは思い込みに過ぎないと考えられる。

2.2 FKMの活動開始

(1) 2000年12月18日”Kedaulatan”を宣言

”Kedaulatan”は普通に訳せば独立宣言であり、これに対するキリスト教各派指導者らの中止を説得に反して行われた。FKM指導者アレックス・マヌプティ (Alex Manuputty、以下A.マヌプティ) 医師は分離主義ではないと主張したが、2001年1月11日に逮捕された。^⑤

(2) 2001年1月13日A.マヌプティ逮捕に対する抗議デモ

州庁舎にキリスト教徒群集がRMS国旗を持って集合し、「なぜA.マヌプティは逮捕でウマル・タリブは野放しなのか」と主張した。これを受けて警察司令官はマルクプロテスタント教会のキリスト教会弁護団 (TPG: Team Pengacara Gereja 以下 TPG) と協議し釈放を合意 (捜査は継続) した。^⑥

(3) 2001年1月18日インドネシア大統領宛書簡送付
同書簡で、FKMは自分たちを、RMSとインドネシア共和国との間の中立な仲介者と主張し、かつインドネシア政府に対してRMSの独立を承認するよう要求。^⑦

この段階ではFKMは、自分たち自身がRMSではないとしながら、同時にRMSの独立を要求するという曲芸的主張を展開している。これに対してキリスト教諸派はそろって反対の姿勢を示しているが、域内最多数派のマルクプロテスタント教会は、逮捕された指導者A.マヌプティの釈放を働きかけており、人脈的にもFKM指導部とつながっていた。^⑧

当然すでにこの段階でFKMをRMSと同一視する見方が出てきている。2001年2月18日に国民統合擁護同盟 (F-PNK = Fraksi Pembela Negara Kesatuan) が「FKMの策略について」と題する声明を発表し、FKMの”Kedaulatan”宣言はRMS的であり、国軍は、アリフル-マルク国家樹立企図するRMS=FKMをたたくべきであると主張している。^⑨

2.3 最初のRMS国旗掲揚事件

(1) 2001年4月25日 (RMS独立宣言記念日) RMS国旗掲揚事件

A.マヌプティが主催し、午前7時アンボン市内クダマティ地区にて式典、約150人出席。中央に国連旗、左にRMS旗、右にインドネシア国旗を掲揚し、1950年のRMS独立宣言文を読み上げた。約10分後警察が式典を中止したが、逮捕者はなかった。

ここでA.マヌプティは、ポルトガル、オランダ、日本、インドネシアによる植民地支配によって抑圧されてきたもかかわらず、マルク独自の文化を保持してきた「アリフル」社会のために式典を開催したと主張した。

州知事とパティムラ大学法学部長がA.マヌプティの不逮捕に疑問を呈したが、警察は言及せず。^⑩

(2) 2001年4月28日の応酬

当然このようなFKMの活動に対して、イスラム教徒は反発し、28日群集が州庁舎に集まって、州知事と軍司令官に抗議し、キリスト教徒と相互に投石する事態となった。これを受けて、州知事が警察司令官にRMS国旗掲揚について、指導者の逮捕を指示した。

同日FKMはマスコミ向け発表で、国際的司法手続きを要求すること、オランダ政府の協力約束を取り付け

ていること、ラスカル・ジハードの破壊行為が許されて、FKMの合法運動が禁止されるのは不当であること、インドネシア政府がマルクでの人権擁護に失敗していること、FKMはいかなる暴力にも反対であることを主張した。

一方キリスト教側では、カトリック教会がいかなる分離主義にも反対の立場を表明し、マルクプロテスタント教会はTPGを解散（指導者セミ・ワエレルニ（Semmy Waeleruny、以下ワエレルニ）がFKM法務部長のため）し、FKMとの絶縁をアピールした。⁽¹¹⁾

(3) 2001年4月30日SPMMラジオ放送

LJが違法ラジオ放送で、TPGのワエレルニがFKM法務部長であることを指摘して、カトリック教会もプロテスタント教会もFKMの一部であると主張し、さらに国連のアンボン代表部もFKM側であり、4月25日掲揚の国連旗は彼らが提供したのだと喧伝した。

当然国連側は即日、式典には一切関与しておらず、FKMを支持している事実も無いと、LJの主張を全面否定した。⁽¹²⁾

RMS独立記念日などにRMS国旗を掲揚することが、これ以降FKMの基本戦術となる。暴力を用いずに先住民の権利をアピールすることが狙いとみられるが、とりわけ国連やオランダに対するアピール、マルク紛争に国際的関心をひきつけ、支援を引き出したい、同時に、そのような可能性をほのめかすことで、インドネシア政府やイスラム勢力を牽制し妥協を引き出したいということと思われる。

2. 4 最初のFKM裁判

(1) 2001年5月1日A. マヌプティ出頭・逮捕とグラスルーツのデモ⁽¹³⁾

4月30日朝A.マヌプティが警察に出頭し逮捕された。この時FKM幹部メンバーが同行し、シンパ約1000人が、赤地に白文字の横断幕を掲げ「アンボンに直ちに国際法廷を設立せよ」「アリフル迫害はいつ止むのか?」「非アリフルは出て行け」というような主張を喧伝した。

またグラスルーツの代表もこの時、警察司令官に対して以下の要求を読み上げた。

1. ラスカル・ジハードとすべての非マルク人非アリフルのマルクからの退去
2. 全てのサラニ、サラムとカキハン（キリスト教徒、ムスリム、アニミスト）は、敵対と殺人を止め、ラワメナ・ハウララに再統合し、あらゆる不正と戦え。キリスト教徒はムスリム同胞を迎え入れよ。
3. マルク人の苦難を終わらせるために国際法廷と国際会議を。
4. 政治エリートは自己の利益のために民衆を煽動するのを止めよ
5. マルク人は自らの問題に集中しよう

(2) 2001年5月3日オランダ駐インドネシア大使館がFKMについてオランダ政府の立場を広報

カトリック教会アンボン司教区危機センターに電話で、「オランダ政府はインドネシア共和国の領土統一を無条件に支持し、いかなる分離主義も支持しないし是認しない」との内容の周知を要請。⁽¹⁴⁾

(3) 2001年5月17日(?)インドネシア警察司令官命令

インドネシア警察司令官が、マルク州警察司令官にFKMなRMS支持の運動全てを解体するよう指示した。⁽¹⁵⁾

(4) 2001年6月13日A. マヌプティが裁判について見通し発言

分離主義では無罪、なぜならRMSは正統な独立国家であり、インドネシアによる支配が不当であるから。複数の法律家が、レンビル協定、リングジャティ協定、ハーグ円卓会議を根拠に無罪弁論を準備している。複数のオランダ人を含む複数国籍の弁護士から支援を得ている。⁽¹⁶⁾

(5) 2001年9月26日マルク州警察司令官のRMS旗掲揚事件裁判見通し

A. マヌプティは1年以下の禁固、罪状は事前の知事による禁止にさからって式典を行ったこと。⁽¹⁷⁾

(6) A. マヌプティの一審公判

2001年10月19日からアンボン市内で治安部隊の警戒の中開始。10月25日A. マヌプティの弁護士クリス・ラハヤーンは、本件を国際法廷に持ち出す予定で、その準備は出来ていると発言。11月9日判決禁固4ヶ月、双方とも即時上訴。⁽¹⁸⁾

(7) 2002年2月1日マリノ和平会議での関係討議

同会議に参加した平和運動家のJ. マヌプティ（Jacky Manuputty、以下J. マヌプティ）牧師が、カトリック教会アンボン司教区危機センターに知らせてきた内容によれば、紛争解決と平和のための重要争点は、ムスリムにとってはFKM運動、キリスト教徒にとってはラスカル・ジハードの問題であった。⁽¹⁹⁾

(8) 2002年4月17日A. マヌプティ第二審判決

判決は禁固6ヶ月、言い渡しの後A. マヌプティが集まったシンバの前で演説を行った。⁽²⁰⁾

2001年4月25日のRMS国旗掲揚事件裁判を通じて、FKMはその主張を明確かつ大々的に地域にひろめた。FKMの狙いが筆者の考察の通り、独立と国際社会の支援介入のほのめかしによる、インドネシア政府およびイスラム教徒勢力に対する牽制であったなら、それは成功であった。

マリノ和平会議において、イスラム教徒勢力は、実際には集会を開いて旗を掲げただけのFKM運動を、キリ

スト教徒側が域外から武装して戦闘訓練を受けてキリスト教徒を攻撃しにやってくるLJを問題とするのと、あたかも同等に問題にし始めた。

インドネシア政府もFKMに対する取扱いに慎重であったように見える。指導者の逮捕や判決に際してデモや演説が許されているのは異例なことであろう。2月のマリノII和平合意の成立にFKMが、結果的に貢献したと言つて良いであろう。

2. 5 第二回のRMS国旗掲揚事件

(1) 2002年4月25日事件

気球にRMS国旗をつけたもの3つがアンボン上空に飛ばされ、市内二箇所でもRMS国旗掲揚が行われた。また市外でも、西セラムのアマハイとワイサレサ、サパル島ハルク島でもRMS国旗掲揚が行われ、さらに27日にもRMS国旗を伴う気球二つが飛ばされた。一連の事件に関わって、5月2日に27人が逮捕された。⁽²¹⁾

(2) ラスカル・ジハード司令官ウマル・タリブ逮捕

2002年5月4日午後4時スラバヤ空港で逮捕され、即日ジャカルタへ移送された。同時に7人が逮捕され、スラバヤで勾留された。この知らせを受けてアンボン市内でイスラム教徒側によるキリスト教地区攻撃があり、死亡2人負傷22人の被害を出した。

5月7日州知事が会見し、この件について全国レヴェルのマスメディアを逮捕報道で偏向していると非難し、特にスラバヤのメディアはFKM関係者の逮捕裁判禁固を、ウマル・タリブ逮捕と同時に報じるよう要望した。⁽²²⁾

(3) 2002年5月10日ユドヨノ政治治安担当相声明
最近のアンボンでの暴力は、FKMとラスカル・ジハードの活動が原因であり、FKMについては国際的に「非暴力で統一に危険でない」と評価されているが、現実には危険であると主張。FKMはすぐに解散させ、LJは地域外に追放すると宣言した。⁽²³⁾

(4) 2002年5月13日FKAWJ大会

アイップ・シャフルディン議長が開会演説で、LJのマルクからの撤退に①軍警察によるマルクムスリム社会の安全保障、②政府によるRMS分離主義運動解体という二つの条件を提示した。

これに対しハムザ・ハズ副大統領は、FKMの解体を約束し、その後LJが撤退するよう提案した。⁽²⁴⁾

(5) 2002年6月15日副大統領声明 *31

LJなどムスリム武装組織の武装解除に立会うためアンボン滞在中に、軍司令官に対し、銃声爆発音があればRMSに違いないからすぐに逮捕せよと命令、州知事に対して、もしもどこかでRMS国旗があがったら、緊急統治官の任を解くと警告した。⁽²⁵⁾

2002年2月のマリノII合意以降、マルク紛争は沈静化

に向かったとするのが、一般的評価であるが、実際のLJなどイスラム武装組織撤退は6月以降であった。同年4月25日の第二回のRMS国旗掲揚事件の後で、FKM関係者27人が逮捕され、日を置かずにウマル・タリブらLJ指導者8人が逮捕されたことから、実際のLJ武装解除撤退過程は具体化したように見える。

この段階においてはLJなどイスラム勢力はFKMを完全にLJと対等に、その解散とLJの撤退を交換条件とするものと考えている。またユドヨノ政治治安担当相やハムザ・ハズ副大統領も、同様の意見を示している。さらに副大統領ハムザ・ハズは、明らかにLJよりの立場に立っているが、ウマル・タリブらLJ指導部の逮捕が実現し、副大統領自身LJ撤退を提案するに至ったのである。

2. 6 第二回のFKM裁判

(1) 2002年8月19日公判開始

北ジャカルタ地方裁判所でA. マヌプティとワエレルニを被告として審理開始、罪状は2002年4月25日のRMS国旗掲揚とRMS独立企図、最高刑は死刑。支持者数百人が裁判所前に集結。⁽²⁶⁾

(2) 2002年10月21日FKMメンバー14人に判決

上記裁判と別に2002年RMS国旗掲揚に関わってアンボン地方裁判所で審理判決、全員に2年から5年の刑が言い渡された。⁽²⁷⁾

(3) 2002年12月19日A. マヌプティとワエレルニの求刑公判

検察官は5年の刑を求刑、両被告とも罪を認めず、A. マヌプティは国際法廷しか認めないと宣言していた。この後半の後12月28日両被告保釈。⁽²⁸⁾

(4) 2003年1月11日A. マヌプティとワエレルニのアンボン帰還

約千人が二人を歓迎、数百人のシンパとともにシナル教会で礼拝に参列。⁽²⁹⁾

(5) 2003年3月17日A. マヌプティとワエレルニ収監

両名とも3年の刑に服するためジャカルタへ移送、自宅と警察本部前で数百人の見送りの若者を前に、A. マヌプティが「平静を保ち、RMS独立を実現する自分の帰還を待つように」と演説。⁽³⁰⁾

この二回目の裁判では、A. マヌプティとともにFKMの法務幹部であったワエレルニも起訴され、旗の掲揚だけでなく国家の分裂を企てた罪も問われ、死刑もあろうる深刻な事態であった。

ところが実際の経過をみると、求刑公判の後に保釈が認められてアンボン市への帰還が認められ、さらに刑の執行前にはまたもや支持者への演説がゆるされ、そこでA. マヌプティはRMS独立を実現すると語ってい

る。

こうなるとFKMをめぐる状況全体が、壮大な茶番のようにも見えてくる。

2. 7 その後のFKMとA. マヌプティ

(1) 2003年4月25日 RMS 旗掲揚

当局の厳しい事前警告にもかかわらず、前夜から未明にかけて約200のRMS国旗が域内各地で掲揚された。これにかかわって、アンボン市内アンボン島内近隣島嶼各地村落で数百人が逮捕されたが、なかでもハルク島アボル村では百人がアンボンへ移送され、FKMとの関係を取り調べられた。⁽³¹⁾

(2) 2003年5月22日 FKM ニューゼーランド事務所開設計画

A. マヌプティがニューゼーランドのオークランドに事務所開設を計画しているとの情報が流れ、マルク州軍司令官は、オークランドに向かうFKM支持者は逮捕すると発言した。⁽³²⁾

(3) A. マヌプティ出国

2003年11月9日A. マヌプティとワエレルニが釈放され、⁽³³⁾ 11月19日A. マヌプティは渡米、FKMの説明では目的はFKM運動への支援要請である。ワエレルニによれば、この渡米は逃亡ではなく、インドネシア政府の承認を得た渡航であった。⁽³⁴⁾

ワエレルニは旅券を発給した出入国管理事務所について明らかにせず、A. マヌプティはアメリカで多数人権団体の招待を受けており、2004年2月に国連で演説予定であると語った。⁽³⁴⁾

出入国管理局長は、どこの港湾空港からもA. マヌプティは出国できないと声明し、この時点ではA. マヌプティが米国に居るかどうか不明であった。⁽³⁴⁾

(4) 2003年12月21日A. マヌプティのロスアンジェルス滞在確認

インドポス紙がA. マヌプティのロスアンジェルス滞を確認したと報道。インドネシア警察司令部は、ジャカルタ裁判所が要求すればA. マヌプティを逮捕すると確認したが、インドポス紙はA. マヌプティが領事館前で支持者5人と2回デモを行ったと報じる。この点について領事館の公式発表はなかった。⁽³⁵⁾

(5) A. マヌプティ身柄要求

2004年1月5日インドネシア政府は米国政府に対してA. マヌプティの送還を要請中であると、外務省報道官がジャカルタポストの取材に回答。⁽³⁶⁾

(6) 米政府が身柄引き渡し拒否

2004年2月11日ハサン・ウィラユダ外相が議会外務委員会で、米国政府はA. マヌプティのヴィザ取り消しを拒否し、逆に旅券を停止するよう反論されたと証言、

A. マヌプティが領事館前で3回デモを行ったことなども米側に説明。⁽³⁷⁾

A. マヌプティとワエレルニの両FKM指導者が服役し、FKM運動は終息すると推測するのが自然であるが、実際には2003年4月25日三度のRMS国旗掲揚事件が発生し、さらにA. マヌプティらが刑期の途中で釈放され、A. マヌプティは渡米する。

国連での演説予定だとか、多数の人権団体から招待などというのは、やはりブラフと思われるが、ロサンゼルス市内のインドネシア領事館前でデモを行うなど、米国で活動を継続した。

奇妙な点は枚挙にいとまがない。刑期を終えずに釈放されたこと、なぜか出国し米国に入学し、ヴィザも発給されてロサンゼルスに滞在、インドネシア政府は身柄の引き渡しを要求したと言うが、実際には米国に滞在許可取り消しを求めたらしいこと、米国から逆に滞在許可取り消し要求するなら旅券を停止せよと反論されていること、おかしいことだらけである。

3. おわりに：FKMとは何だったのか

3. 1 インドネシアおよびマルクにおける一般的評価

インドネシア中央政府、マルク州政府、イスラム勢力、キリスト教会諸派、国連、オランダ政府など、当該紛争に関係したFKM以外全関係者の一致した見解として、分離主義であり支持できない(少なくとも建前としては)存在である。

ただし、マルクプロテスタント教会については、その表面上の見解を額面通り受け取ることはできない。少なくともFKM運動の初期においてマルクプロテスタント教会とFKMは協力関係にあったと見るべきである。また、マルク先住民の権利主張、域外からの干渉排除という主張は、マルクプロテスタント教会の政治主張全体と整合的でもある。

また、逮捕されたり有罪判決を受けた際に、繰り返してA. マヌプティに演説などの主張の機会が与えられたことや、最終的に米国に亡命できたことなどからみて、インドネシア政府や州政府、あるいは軍・警察も、少なくともその一部がFKMを利用していたと考えるのが自然である。

3. 2 筆者の見解

FKM運動の倫理的是非はさておき、少なくとも結果的に①インドネシア政府に国際社会の目を意識させた、②FKM解体がLJ撤退の引き換え条件となったことで紛争終結に寄与したことは間違いない。

しかし、FKMのこの貢献は、インドネシア社会にもともと存在し、紛争自体の背景要因であった、アンボンのキリスト教徒に対する親オランダ=親欧米=反イスラム=反インドネシア共和国という誤解を利用したものである。したがって、結果的に当該紛争の終結に貢献したとはいえ、インドネシア社会にアンボン人キリ

スト教徒に対する誤解をさらにひろめたことは間違いなく、その点で将来の新たな紛争の種をまいたともいえる。

FKM の活動は現在では非常に低調であるが、全く消滅したわけではなく、おそらく域外イスラム勢力などへの牽制を意図して継続していると思われる。したがってマルク情勢は沈静化し安定化が進んでいるが、依然として注視されなければならない。

注

- (1) 参考文献[12]
- (2) 参考文献[1]
- (3) 同上 80,86 ページ
- (4) 同上 306,326,333 ページ
- (5) 同上 131 ページ
- (6) 同上 132 ページ
- (7) 同上 158 ページ
- (8) 本稿 2.3 (2) 参照
- (9) 参考文献[1]143 ページ
- (10) 同上 162-164 ページ
- (11) 同上 165-166 ページ
- (12) 同上 166 ページ
- (13) 同上 167-168 ページ、なおグラスルーツは、当該紛争においてキリスト教徒勢力のいろいろな組織団体個人が用いた呼称である。
- (14) 参考文献[1]169 ページ
- (15) 同上 173 ページ
- (16) 同上 183-184 ページ
- (17) 同上 197 ページ
- (18) 同上 200,202 ページ
- (19) 同上 217 ページ、J. マヌプティ牧師は国際的に有名な平和運動指導者で、紛争扇動に対抗する IT 情報広報運動「ピースプロボケイター」の中心人物としても知られている。
- (20) 参考文献[1]238 ページ
- (21) 同上 240-242,245 ページ
- (22) 同上 250-251 ページ
- (23) 同上 255 ページ
- (24) 同上 257 ページ
- (25) 同上 265 ページ
- (26) 同上 276 ページ
- (27) 同上 284 ページ
- (28) 同上 292,294 ページ
- (29) 同上 296-297 ページ
- (30) 同上 302-303 ページ
- (31) 同上 307-308 ページ
- (32) 同上 309 ページ
- (33) 同上 328 ページ

- (34) 同上 330-331 ページ
- (35) 同上 332 ページ
- (36) 同上 333 ページ
- (37) 同上 336 ページ

参考文献

- [1] C. J. Böhm msc, *Brief Chronicle of the Unrest in the Moluccas 1999 - 2006*. CRISIS CENTRE DIOCESE OF AMBOINA Jalan Pattimura 32 Ambon 97124 - Indonesia.
- [2] Adam, Jeroen, How Ordinary Folk Became Involved in the Ambonese Conflict: Understanding Private Opportunities during Communal violence. *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde*, 166/1, 2010, KITLV.
- [3] Sidel, John T., *Riots, Pogroms, Jihad: Religious Violence in Indonesia*. Cornell: Cornell University Press, (2006)
- [4] Goss, Jon D. Understanding of the 'Maluku Wars': Overview of Sources of Communal Conflict and Prospects for Peace. *Cakalele: Maluku Research Journal* 11: 7-39, (2004)
- [5] Spyer, Patricia, Fire without Smoke and Other Phantoms of Ambon's Violence: Media Effects, Agency, and the Work of Imagination. *Indonesia* 74: 21-36, (2002)
- [6] Schulze, Kirsten E., Laskar Jihad and the Conflict in Ambon. *The Brown Journal of World Affairs* 9(1): 57-69, (2002)
- [7] Bertrand, Jacques., *Nationalism and Ethnic Conflict in Indonesia*. Cambridge, UK: Cambridge University Press, (2004)
Legacies of the Authoritarian Past: Religious Violence in Indonesia's Moluccan Islands. *Pacific Affairs* 75(1): 57-85, (2002)
- [8] Sumanto Al Qurtuby., Ambonese Muslim Jihadists, Islamic Identity, and the History of Christian-Muslim Rivalry in the Moluccas, Eastern Indonesia. *International Journal of Asian Studies* 12(1):1-29, (2015)
Religious Women for Peace and Reconciliation in Contemporary Indonesia. *International Journal on World Peace* 31(1): 27-58, (2014)
Peacebuilding in Indonesia: Christian-Muslim Alliance in Ambon Island. *Islam and Christian-Muslim Relations* 24(3): 349-367, (2013)

- [9] Birgit Brähler ed. *Reconciling Indonesia: Grassroots agency for peace* London & NY 2009.
- [10] 河野佳春「2014年のアンボン情勢について—紛争・和解と地域伝統—」弓削商船高等専門学校紀要第37号, 93-99頁, (2015年)
- [11] 河野佳春「アンボン2011年9月11日暴動に関する覚書」弓削商船高等専門学校紀要第35号, 91-97頁, (2012年)
- [12] 河野佳春「最近のアンボン情勢についての覚書」弓削商船高等専門学校紀要第29号, 137-143頁, (2007年)
- [13] 河野佳春「マルク難民訪問記」『広島東洋史学報』第6号, (2001年)